

2012年11月 - 12月6日ガザ紛争後の聞き取り調査

調査対象：AEI スタッフ8名、ボランティアスタッフ17名、受益者13世帯  
調査期間：2012年12月25日～12月6日  
調査実施目的：被害状況の把握と、事業立直しの足掛かりとして実施  
調査実施者：金子由佳（ガザ事業現地調整員）

○ 聞き取り対象者一覧

※但し便宜上後述の聞き取り詳細は時系列にする。

**1. AEI スタッフ（ファーストネームのみ記載）8人（プロジェクトメンバー全員）**

- 1) アマル（AEI 栄養失調予防プロジェクトコーディネーター）
- 2) ハイファ（同プロジェクト地域保健員指導員）
- 3) サマーヘル（同プロジェクト地域保健員ゼイトゥーン担当）
- 4) ガーダ（同上）
- 5) ヘクマッド（同プロジェクト地域保健員トゥッフアーハ担当）
- 6) マハ・アメン（同上）
- 7) メルバット・サアッド（同プロジェクト地域保健員シャジャイヤ担当）
- 8) モナ・ヨセフ（同上）

**2. 事業ボランティア（ファーストネームのみ記載）17人（プロジェクトボランティアメンバー40人中）**

ゼイトゥーン担当

- 1) モナ（1）
- 2) モナ（2）
- 3) ヤーセル
- 4) タマーム
- 5) ナジャール

トゥッフアーハ担当

- 1) ボサイナ
- 2) インティサ
- 3) サイダ

シャジャイヤ担当

- 1) イブティサ
- 2) アディーラ（オンフェーサ）
- 3) バーキーザ
- 4) ハナーム

- 5) ナジュア
- 6) ナジャーハ
- 7) シャディア
- 8) スアー
- 9) ハイアーム

### 3. 受益者 13 世帯

#### ゼイトウン

- 1) アル・ハッダート家
- 2) アブゾール家
- 3) カターティ家
- 4) アシューフ家
- 5) その他 3 世帯

#### トゥッフアーハ

- 1) アブ・ディルアール家
- 2) アーレフ家
- 3) アブ・ジャラーダ家
- 4) ジャックラヤード家
- 5) モンサウイー家

#### シャジャヤイヤ

- 1) アブ・サッカラン家

#### ○ 聞き取り内容の報告

【11月25日】

・アマル（ベイト・ハヌーン在中）…戦争中毎日安否と状況確認のために電話していた AEI スタッフでプロジェクトコーディネーターのアマルに25日にAEI オフィスで再開した。以下は彼女からの聞き取りからの引用。



「交戦中は実施事業の活動も全く行えず、自宅待機していた。自宅のあるベイト・ハヌーンは、境界線に近いこともあって攻撃が激しく、とても外に出られる状況ではなかった。近所にある母親や姉妹の家へ様子を見に行ったり、状況を見て必要最低限の食料を買い物に行ったりするだけで精一杯で、それすらままならないことも多かった。今年度事業地への訪問はこれから行う予定で、被害状況を把握してから何ができるか考えたいが、自分も含めて精神的にダメージを負っている人がたくさんいると思う。事業再開がいつになるかは分からないが、今後慎重に方向性を見極めたい。」

※調査実施者は、同日夕方 ベイト・ハヌーンのアマル宅を訪問し、アマルの姉妹、お母

さん、子ども、姪・甥に会った。境界線に近いこともあり、空爆のみならず戦車からの砲弾を多く受けていた現地では、戦車からの砲撃によって飛散した大きな砲弾の破片を見ることができた（写真は調査実施者の膝の上に載せてとった砲弾の破片）。アマルの家は攻撃中始終家が揺れたようで、大きなひびが入るなどの被害が出ていた。幸い近所で死傷者は出ず、子どもたちもそれなりに元気だったので、一安心したが、お母さんは攻撃が止んでいると、頭で理解していても、まだ恐怖が残っていて、「停戦を信じられないのだ」と何回も調査実施者に話した。子どもたちも平常を出来るだけ装っているが、やはり目の下にクマがあり、一様に疲れていて、攻撃が人々の生死に留まる問題でなく、精神的に深く傷を残すものだと実感した。

・ハイファ（ハン・ユニス在中）…25日同じくプロジェクトの保健指導員のハイファと再会した。下記は終戦直後の聞き取りからの引用。

「ハン・ユニスはガザに比べて空爆が少なかったように思うが、それでも外に出るのは大きなリスクがあった。小さい子どもがいるので、食糧の買い出しに行かねばならず、夫に頼んで買い物に何度か行ってもらった。危険だと思っていたが、それ以外に方法が無かった。しかし、幸い近所、友人、またラファに住む家族に被害はなく神に感謝している。今回の事で自分は何ともなかったが、前回の戦争で父親を亡くしているの、それを空爆中に思い出してとても悲しくなった。涙が止まらなかった。しかし、子どももいるので強くありたいと思う。事業に関しては今後の聞き取りを進めて実施の方向性を見極めたい。」

【11月26日】

2012年度事業実施地ガザ市ゼイトゥーンへ訪問。4世帯から聞き取りを実施。

現地便り「停戦後のガザより」参照

<http://www.ngo-jvc.net/jp/projects/palestine-report/2012/11/20121127-palestine.html>

【11月27日】

2012年度事業実施地ガザ市トゥッファーハ訪問。8世帯から聞き取りを実施。

現地便り「停戦後のガザより（2）」参照

<http://www.ngo-jvc.net/jp/projects/palestine-report/2012/11/20121128-palestine.html>

【11月28日】

2012年度事業実施地ガザ市シャジャイヤ訪問。1世帯から聞き取りを実施。午前中に UNICEF の Child Protection クラスタ会議に参加した後、シャジャイヤのアブ・サッカラン家を訪問した。時間の関係で28日は一軒しか回れなかったが、



この家はF16 戦闘機からの空爆を隣の空き地に4発受けた。以下は対応してくれたお婆さんご家族への聞き取りからの引用（おばあさんは65歳で、足が悪いが、泣きながら懸命に説明してくれた）。

「家への直接攻撃ではなかったがその衝撃と音はすさまじく、攻撃後地面に開いた穴はとて大きなものだった（実際調査実施者もその穴を見たが、20メートル四方、深さも5メートル以上あるようだった）飛び散った土砂や瓦礫によって、窓や屋根、水タンクあちこち



が壊され、庭に置いてある息子の車もその土砂によって壊されてしまった。息子はタクシー運転手をして生計を立てているので、これからどうやって生きて行けばよいのかわからない（ちなみに隣家もタクシー運転手として生計を立てている人がいたが、彼の車も壊されてしまった）。殺されると何度も思っていて恐怖した。家の修繕には時間がかかると思っているが、たくさんいる孫たち（同じビルに15人以上の孫が一緒

に住んでいる）、家族がとにかく無事だったのは、本当に神の恵みだと思っている。次回紛争が起きたら、この家はもうないかもしれないが、また家に来てほしい。今回見に来てくれたことにとっても感謝している。（ちなみにこの家は前回は空爆を受けている）。」

※11月29日～12月3日はエルサレム事業の関係でガザを離れた。

#### 【12月5日】

再度ガザ入りした12月4日、緊急支援で配布した救急箱（ファースト・エイド・キット）の配布の様子を視察した。翌5日には、AEIスタッフに再度集ってもらい事業地の被害状況と事業の方向性の見直しに関する必要性について討議した。以下は地域保健指導員からの聞き取りのもと、地域ごとにまとめた被害結果である。

#### ゼイトゥーン

- 担当保健員：サマーヘル／ガーダ
- 死者：9人（アブゾール家3、アシューフ家1、カターティ家1、アラファト家1、ターファッシュ家1、ハダートゥ家2）
- 負傷者：多数
- 全壊家屋：90、半壊及び屋根へのダメージ多数
- その他：ゼイトゥーンはガザ市の中でも被害が多かったと言われている。事実死者数も多く、また家屋への被害が多い。小さいミサイルや、隣家への攻撃によって飛び散った瓦礫などにより、屋根に被害を受けている。また通常屋根に備え付けられている、水タンクや太陽光パネルで水を温めるヒーターシステムに被害を受けて、支援を待っている家庭が多数見受けられる。精神的苦痛を訴えるケース

も多い。ある受益者宅の12歳になる女の子は、未だにご飯を食べられないでいる。また60歳の女性は、毎日叫び続けて、パニック状態が収まらない。また3歳の男の子で、眠れずに衰弱している子もいる。それぞれ命にかかわるほどではないが、これを癒すには時間がかかると考えている。当の保健員ガータの家も被害を受けて、現在修復待ちの状態だが、いつ修復作業に取り掛かれるのかわからない。

#### トゥフアーハ

- 担当保健員：ヘクマッド/マハ・アメン
- 死者：2人（家族名不明だが、成人男性1、成人女性1）
- 負傷者：11人（うち2人が重傷で未だに入院中、またうち5人は子ども）
- 全壊家屋：43、半壊家屋多数（学校への被害もあり）
- その他：幾人かの受益者宅の子どもは攻撃後非常に暴力的になった。また、ある子は叫ぶなどのパニック症状を訴えている。動悸がする、めまいがするなどの症状を訴える大人も多数いる。死者数は他のエリアに比べて少なかったものの、精神的なダメージが強い。また自宅が破壊されてそこに帰ることができない人々は、親類宅に身を寄せている。精神力が強い人は今回の危機を乗り切ったが、恐怖などから解放されずずっと引きずる人がいると思っている。



#### シャジャヤイヤ

- 担当保健ワーカー：マルベット/モナ・ヨセフ
- 死者：5人（イスカーフィ家1、ヘタム・スリーム家1（母親リーダー宅）、シャワ家1、ハルブ家1、シンディ家1）
- 全壊：約20、半壊多数（学校含む）
- その他：メルバットの家は被害を受けて修復中で、モナの家には、家が壊された親類が来ていて現在13人で住んでいる。幸い家族に死傷者は出なかったが、地域を見ているとやはり精神的ダメージを負った人が多い。ある受益者宅の2歳半になる男の子は、身体的なダメージは無いのに衰弱し、戦争後ワッハ病院に入院している。また空爆が激しかった8日間、日雇い労働者の人々は仕事に行けず、物が食べられずにいた。その間近所同士で助け合っていたが、彼らもようやく仕事に行けてうれしいと思う。また、シャジャヤイヤで殺されたわけではないが、ハマスの武装部門（アル・カッサム）のトップの一人で、14日にピンポイント爆撃で殺された（これが今回の戦争を拡大させた要因と言われている）アフマド・アル・ジャバリとその側近はシャジャヤイヤ出身である。ヘタム・スリーム家で殺されたアイマンは、シャジャヤイヤの母親リーダーの息子である。

（写真左から：マルベット、マハ、ヘクマッド、モナ、金子、サマーヘル、ガー

タ、ハイファ、下：アマル)

#### \*AEI スタッフの今年度事業方向見直しに関する見解

戦争後、すぐに受益者宅訪問を再開した。特に出産直後の母親宅には重点的に訪問し、安否確認と、精神的ダメージに関する聞き取りを行っている。今回の攻撃で、ほぼすべてのガザの人々が、精神的にダメージを受けたと言える。しかし、あまりに多くの人の精神状態が不安定で、それに何か特別なことをしなければと思っていたが、これらを個別に対応することは実際のところ難しく、良く考えてみると、「通常 (Normal)」の活動に戻る事が空爆という非日常とそれから受けた精神的ダメージから回復するには一番効率的で、実際役立つと考えている。つまり、通常生活に戻ること、自分たちも含めて、人々はその苦しみを忘れることができると考えている。また、戦争中はどの家もまともに買い物に行けず、子どもたちの栄養状態も偏っていたと考えている。授乳中の母親も、精神的苦痛と栄養不足で栄養のある授乳ができなかった可能性も高い。自分たちのできることは、そういった家庭を訪問し、話を聞き、少しでもストレスや戸惑いから母親を解放する事であり、またそれによって、子どもたちの精神状態もある程度把握できて、栄養状態を安定する事にもつながると考えている。また、ケースによっては精神ケアの専門家へつなげることは AEI としても可能で、今後家庭訪問を通じて深刻な精神的ダメージが見受けられた場合は、そのように対応することも可能だと思っている。一方、幼稚園や地域社会施設 (CBO) で行っていた、意識改善の取り組み、各地で毎週行っていた調理実習の取り組みは、家屋破壊の被害が多い中、空爆前のように定期的に実施する事が難しいことも事実であるため、これらに関しては回数を減らして徐々に増やしていくことを考えている。

#### **【12月6日】**

6日には、各事業地で働く母親リーダー21人にも集まってもらい、時間の許す限り一人一人話を聞いた。彼女の幾人かは既に戦争直後から受益者宅を訪問していて、その行動が、もともとガザの女性たちが持っているホスピタリティや優しさ、強さの現れであることに感動するとともに、当活動がそれだけ地域に浸透していて、既に地域の営みの一つとなっていることの現れのようにも感じ、活動の真価を見た気がした。幾人かは自身もひどい経験をして簡単には活動に戻ることができないと思うが、出来る人から、出来る範囲で活動に戻り、出来るだけ早く攻撃前の通常活動に戻ることが求められているのかもしれないと感じた。以下は、この時の聞き取りからの抜粋である。またこのミーティングのあと、事業関係者家族で初めて死亡を知らされた同じく母親リーダーであるヘタムの息子アイマン宅にも訪問したので、その様子も同じく記述する。

#### ゼイトゥーン

- 1) モナ (1) …自宅周辺では家の倒壊、怪我、死亡などは全くなかった。しかし、人々の精神的状態は前回の戦争時よりも酷い状態と感じている。自分は元気だが。

- 2) モナ (2) …戦争中でも、普通に生活する事、それが大事だと考えていたのでできるだけ普通の生活を送るように過ごした。しかし、19 歳になる娘はその後ご飯を食べることが難しくなっている。精神的なストレスから来るようだ。ゼイトゥーンでは、今年度事業エリア外ではあるが、母親が子ども 2 人を守るために命を落とした。守られた子どもは生き残ったが、とても痛ましいことだと感じている。
- 3) ヤーセル…自分の家の周辺は激しく空爆を受けた。自分の家と娘の家は屋根が完全に破壊された。また、ミサイルの破片が周辺に飛び散って、逃げたかったが、周辺が空爆されていたので、逃げる場所が無かった。しかし途中で娘婿が迎えに来てくれて逃げられた。ゼイトゥーン以外の地域に逃げた。地域の子供たちも非常に怖がっていた。自分自身、2008 年に息子を一人殺されているので、そのことを思い出して非常に悲しかった。
- 4) タマーム…戦争中、娘の子どもが生まれた。病院に連れていった時、自分が AEI で働いていると説明したら、看護師に、子どものケアの仕方について聞かれたので、教えた。例えば、栄養失調、貧血などについて教えたところ、看護師は、自分の子どもを AEI へ連れて行ってほしいと言っていた。家の周辺への空爆は激しく、子どもたちもひどく怯えていたが、実質的な被害は少なかったのよかったですと思っている。
- 5) ナジャール…2 年前夫が他の女性と結婚して、自分は子どもと共に家を追い出された。戦争中は障害を持つ母親もいて、守ってくれる夫もいないし、とても苦しかった。運よく、借りている家は空爆されず、何も被害はなかった。笑い話としては、戦争中、近くに住む猫が家の電源の線を切つて急に電気が落ちたので、家族はイスラエルによるものかととても恐れたが、結局は猫のせいだということがわかって、ホッとした。

#### トゥッフアーハ

- 1) ボサイナ…周辺で多くの空爆があった。知人が、ピンポイント爆撃による暗殺によって目の前で殺された。家の後ろは空き地だが、そこにも大きなミサイルが撃ち込まれ、飛び散った大量の土砂によって、自宅の窓が割れ、飛び散ったガラスで家中歩くこともままならなかった。また、その砂が井戸にも入り込んで、しばらく水が使えなかった。また、別の日、洗濯物を屋上に干していたら、またその空き地に空爆があった。自分自身はすぐ後ろにその空爆を受けたと感じたので、次は自分が殺されると感じてとても怖かった。
- 2) インティサ…空爆がひどく、ずっとパニック状態だった。娘は 7 歳だが、自分の近くから離れられなかった。怖がってトイレにも行けない様子で、また自分がトイレに行く時もついてきた。また、25 歳になる上の娘も食事をとれないでいる。もう一人の 22 歳の娘は体調不良を訴えて、今精神ケアの治療に通っている。
- 3) サイダ…自分は特別な経験をしなかったなので、心身ともに問題ないと感じている。空爆中子どもたちはよく屋根に上って、様子を見ていたが、幸いなことに被害が無かったのよかったです。

#### シャジャイヤ

- 1) イプティサ…自分自身は怖くなかったが、子どものことがとても心配だった。7日間、家の近くで爆撃が続いた。そのために多くの瓦礫が家の周辺にまっけて、子どもたちはその爆撃を恐れて一日中床に伏せたり、泣いたりしていた。身体的には大丈夫だったが、精神的にはひどいダメージを受けた。今回の戦争中は、テレビを見ることができたが、パレスチナ人が一丸とな



ってこの戦争を乗り切ろうとしていた姿勢に、自分はとても励まされた。ハマスもファタハも今まで共に戦うことは無かったのに、今回の事で共闘していたのが印象的だ。一方一番つらかったのは、停戦後、本当に停戦されたのかどうかを確認できずにいたところだ。「本当に戦争は終わったのか？」としばらく信じられずにいた。しかし、確認できた時、近所の人々が道にあふれてお祝いしていたのがとてもうれしかった。)しかし、アッダール家の悲劇(空爆によって一家11人全員が殺され、その家は跡形もないひどい状態だったため、今回のイスラエルの空爆を象徴する痛ましい事件としてガザの人々の記憶に強く残っている)についてはみんな悲しんでいた。

- 2) アディーラ(オンフェーサ)…怖かったが、孫と子どもを安心させるために、怖くないふりをした。自分が恐れているところを見せると、必要以上に子どもと、孫を怖がらせてしまうと思った。子どもと、孫は、自分(おばあちゃん)が元気であることで、安心していた。いつも彼らと同じ部屋で寝ていた。結婚した娘については、違う場所に住んでいたが、娘宅の近所は酷く空爆を受けて娘宅も被害があった。大事には至らなかったのが幸いだった。停戦後は、幸せを分かち合いたくて、近所に甘いものを配って歩いた。また早速受益者に声をかけるようにした。特別なことはできなかったが、いつものように声をかけることが大事だと思った。自分が見て歩いた受益者には問題が無いように見えた。

- 3) バーキーザ…戦争後の方が、近所の人々、受益者の人々との関係が強くなったように感じている。停戦後受益者宅に訪れて、ただ栄養の事だけでなく、人々の無事を確認し、停戦を共に祝った。みんな元気そうでよかった。通常に戻ることが大事だと感じた。

- 4) ハナーム…家の裏にお墓があるが、そこが空爆された。自分は今妊娠中で、恐怖に襲われて、子どもを流産してしまうのではないかととても怖かった。また、今回のス



トレスで子どもが無事におなかの中で育つか心配している。今は臨月で、いつ子どもが生まれてもおかしくない。活動は中断せざるをえないが、その後については今後考えていきたい。

- 5) ナジュア…家のとなりに空き地があるが、11日、その空き地に3発の攻撃があり、自分の目前で、たまたま近くに居合わせた人々がバラバラになって死んだ。本当に目の前で人々が飛び散ったの



で完全に硬直してしまい、何も言葉にならなかった。14日以降空爆がさらに激しさを増し、自分や子どもたちも殺されると思って、とても怖かった。屋根も完全に壊されて、家族の皆が、次は自分だ、すぐに死ぬのだと思った。空爆のせいで常に粉塵が飛び散り、自分と母親は気管を痛めたため、空爆中シーファ病院に行った。しかし、そこでは多くの死体やひどいけがを負った人々をたくさん見て、それもとてもしョックだった。自分の子どもたちは、今回ひどい精神的なダメージを受け、トイレに行けなくなったり、憂鬱を訴えたりしている。何も手につかない様子で、自分自身も何にも集中できない状態である。来週弟の結婚式があるが、とても祝える気分がない。何をしても幸せと感ぜられない。(※彼女の家は、2006-7年の事業対象地域にあるが、今回集中的に空爆を受けたようだ)。停戦合意があった21日21時直前も、家の隣が空爆された。もう停戦だと思っていた矢先のことで、これもとてもしョかった。家では家族がバラバラに床に伏せたり、大きな家具の影に隠れたりしたが、その時は夫がどこに隠れたのかを確認できないほどだった。

- 6) ナジャーハ…戦争中パンを作ろうと思っていたので、近所にパンづくり用のフライパンを借りなければならなかった。子どもが心配でいつものように、子どもたちに借りにいかせることができなくて、自分で行った。しかしその時に、自分の足元にミサイルが撃ち込まれ、恐怖で完全に固まって、震えが止まらなかった。イスラエルの攻撃手に自分が女であることを示すために髪を見せたら、それ以上攻撃されなかったが、とても怖かった。結婚して別のところに住む娘は、飛び散ったミサイルの破片で怪我をした。大した怪我ではなかったが、その後娘から、救急救命法の知識を教えて欲しいと頼まれたので、彼女の家に行って教えた。その間も空爆の中で外に出るのは怖かった。12歳になる一番小さい自分の息子は恐怖で今でもご飯が食べられず、食べてもすぐに吐いてしまう。自分の夫は2008年に攻撃で亡くなったので、今回誰も自分たちを支えてくれる人がいないと感じてとても心細かった。また、家族のだれもが彼の存在を恋しいと思ひ、不安を感じていた。
- 7) シャディア…2部屋からなる小さい家に住んでいるが、戦争中は独立した娘と息子の家が激しい空爆の地域にあったので、自分の家に招いていた。その間30人、5家族がこの小さい家に住んでいた。息子はいつもアル・アクサTVを見ていたが、ひどいシーンばかりで、自分は精神的にテレビを見るのが嫌だった。娘もひどくストレスを感じていて、今でも食事をまともにとることができないでいる。自分自身は勇気をもって過ごそうと思っていたので大丈夫だったが、それでも子どもたちが心配だ。
- 8) スアー…自宅周辺にたくさん空き地があって、F16からの空爆をそれらの空き地に6回受けた。自分の家の屋根も飛び散った土砂と瓦礫で被害を受け、その時はパニックになり、夫とどこに逃げるが相談したが、逃げる場所が無いことも事実だった。夫の弟は近くに住んでいたが、空爆の間、彼の家と自宅を往復すること以外はどこにも出かけられなかった。弟の家はコンクリでできているので自分の家よりも頑丈だと感じていたので、彼の家にいる時は少し気が休まった。しかし、停戦後、夫も自分も娘も精神的被害を受けていていつトイレに行くかを調整できなくなってしまった。夫は腹痛をよく訴えている。

9) ハイアーム…コンクリではない小さな家に住んでいる。娘が二人いて、戦争中結婚した二人が家に訪ねてきて、怖がっていたので、このミサイルはイスラエルからの物ではなくて、ハマス側が撃ったものだとして説明して明るくふるまうようにしていた。またできるだけ歌ったり踊ったりして、怖さを楽しみで打ち消すようにしていた。21 歳になる息子は、戦いに出たがっていた。しかし、私は息子を失いたくないので、息子が外に行くことを恐れていた。幸い息子は小さなお店を営んでいるので、そのお店のケアで忙しく、結局戦いに行くことが無くてよかった。その他、友人でもあり、ボランティアの同僚であるヘタムの息子、アイマンのお葬式に参加した。彼女も少しずつ元気になっているが、会いに行ってもほしいと思っている。

※母親ボランティアからの聞き取りは 17 人で、時間の関係で全員行えなかったが、12 月 16 日の週にまた集まる計画を立てている。

#### \*母親リーダー、ヘタムの息子、アイマンについて

戦争中一番初めに関係者親族の死亡報告を受けていたシャジャイヤの母親リーダーヘタムの息子アイマンの死亡について、6 日、母親リーダーとのミーティングを終えてから、今回彼女の家を訪ねることができたので、下記に報告したい。彼女は私が訪れた時はとても落ち着いていて、淡々と息子の事を話してくれた。ここからは聞き取りからの引用。

アイマンは、シャジャイヤ郊外にある自宅ではなく、ガザ市中心部で攻撃を受けて亡くなった。自分は死に目には会えなかったが、彼の友人から、彼が死んだときの様子を聞いた。致命傷となった外傷は背中と後頭部で大きかったが、彼の顔に傷はなく、うっすらと目を開けていて、微笑んでいるような穏やかな死に顔だったのでとても慰めになった。(実際調査員もその写真を見せてもらったが、穏やかな顔をしていた)。彼には 2 人の娘と妊娠中の妻がいて、今後彼らが生計をどのように立てるのか心配だ。私にはもう一人息子がいるが、彼が今のところアイマンの家族の分も養っている。アイマンの娘は父親がいつ帰ってくるのか毎日私に訪ねてくるが、今は遠くに行っていて、しばらく帰ってこないと説明している。彼の娘はまだ 5 歳で「死」を理解できないでいる。私自身息子が死んでからしばらく臥せっていたが、最近夢に彼がよく出てきて、「心配しないでいいよ。自分は天国にいる」と言ってくれるので、だいぶ気持ちが楽になった。本当に彼がそばにいるようで、とてもうれしい。今後母親リーダーとして活動できるかは正直わからないが、家を訪ねてくれたことはとてもうれしく思っている。また機会があれば訪ねて欲しい。

以上

#### ○ 聞き取り調査を終えて

これらの聞き取り調査から見てきたものは、今回の攻撃によってもたらされた多大な被害のごく一部でしかない。私は引き続き聞き取りを行うことで、一人でも多くのガザの人の声を外の人々の届けたいと思うとともに、これからの自身の活動に活かしていきたいと

思う。JVCがAEIと協力して取り組む「子どもの栄養失調予防」は、封鎖が続き、医療物資や食料物資の運搬が慢性的に滞るガザにおいて、これからもなくてはならない事業だと考えている。しかし、栄養失調の根本原因が、経済的な貧困や失業問題にあるのではなく、それらを生み出す歪んだ政治構造、封鎖や度重なる軍事攻撃にあることを改めて伝えたい。2008年のガザ攻撃から5年目の今年、また繰り返されてしまった悲劇は、過去から今まで、ガザを取り巻く問題が何も変わっていない事を示している。そして、その根本原因を取り除かない限り、人々が強く生きようとする意志をあざ笑うかのように、本当の問題解決には至らない。私は、「普通に生きたい」と願いながら、地道に活動続ける人々の意思を大事にし、支援していきたいと思っている。しかしそれと同じように、この苦難が早く終わるように、対外的に働きかけることは重要だと考えている。より多くの人にこの報告書を読んでもらい、パレスチナ問題について考えるきっかけとなればと思う。